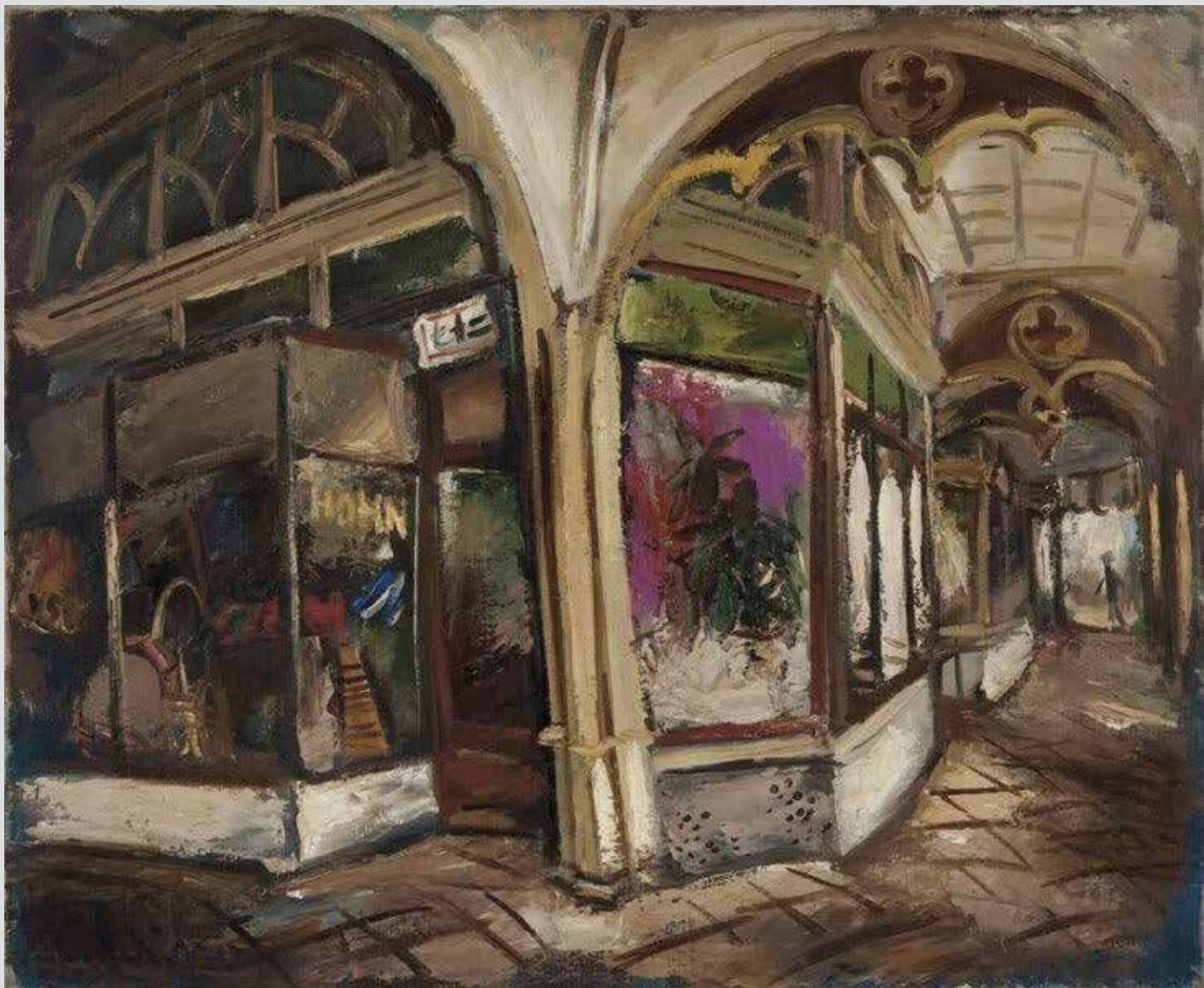


123 ART PAPER

2023 SUMMER

NAGOYA CITY ART MUSEUM NEWS



市野長之介《バザーの楽器店》1929年 油彩・キャンヴァス 名古屋市美術館蔵

グレート・ナゴヤ

特集 大名古屋の面影 近代化する都市と洋画家 市野長之介と西村千太郎

TALK BACK「ジョン・スローン『ヴィレッジ監獄の解体』」 ARTIST「鈴木不知」

アンケートより「コレクションの20世紀」 展覧会現在進行形「開館35周年記念 福田美蘭——美術って、なに?」

REVIEW「ラテンアメリカの民衆芸術」「八幡はるみ GARDEN」 COLUMN「メキシコ美術のポピュラリティ」

名古屋市美術館ニュース アートペーパー

発行 名古屋市美術館

名古屋市中区栄二丁目17番25号(芸術と科学の杜・白川公園内)

TEL 052-212-0001 FAX 052-212-0005

<https://art-museum.city.nagoya.jp/>

休館日 毎週月曜日(祝日の場合は翌平日)、年末年始

開館時間 午前9時30分～午後5時、祝日を除く金曜日は午後8時まで

※入場は閉館の30分前まで

執筆

井口智子(I.)、勝田琴絵(KK)、久保田舞美(mm)、

近藤将人(コ)、清家三智(3)、竹葉丈(J.T.)、

保崎裕徳(nori)、森本陽香(haru)

デザイン 岡田和奈佳

印刷 鬼頭印刷株式会社

発行日 2023年8月1日



Nagoya City Art Museum

グレート・ナゴヤ
特集 大名古屋の面影 近代化する都市と洋画家 市野長之介と西村千太郎

百万都市になったという事はダテでない

人口百万になったという事は広い世界で23番目の都市になった——というだけのソナ簡単な意味ではありません。(昭和4年時事年鑑) [...] 名古屋はこれで単なる東海の一名都から一躍、世界都となって弧状なす秋津島根の中央に起って世界に呼びかけ始めたワケです。¹

名古屋市は、1930年(昭和5年)8月末日をもって、市内人口が103万1895人(公簿調査)に達し、100万人を突破したとして、10月10日、11日の2日間にわたり名古屋市人口百万記念祝賀大会を催行しました(大岩市長は式辞で「名古屋市は世界第27位」と述べています²)。記念式典の他に、以前より進行していた四大事業(中川運河、上水道第3期拡張、下水処理場、公会堂)の竣工式が開催され、中川運河ではボートレース、下水処理場では相撲大会など様々な余興が行われました。10日の昼は市内各小学校の旗行列、夜は全市青年団の提灯行列が実施され、旗行列時に合唱する「祝賀行進歌」なるものまで作られています。

『熱田の宮の加護うけて 大和島根の只中に
いや栄え行く大名古屋 人口まさに百余万³

また、徳川義親侯爵はこの機会に大曾根の徳川家別邸と秘蔵の名什宝器を名古屋市に寄贈することを決意、その正式発表が10日の朝に行われました。これが徳川園となり今日まで継承されています。

1921年(大正10年)8月22日、名古屋市は近接16町村を併合する市域大拡張によって、60万人超の人口を抱える「大名古屋市」を組織することになりました。それから10年、産業の飛躍的な発展と呼応して人口が急増し、1930年10月10日、大東京、大大阪に次ぐ全国3位の規模を誇る「百万都市」であることを内外に宣言するに至り、祝賀行事を催すと同時に、世界的な大都市の市民たる自覚を地域住民に促したのです。

プロウド・ウェイを、日本式に行けば広小路

中部日本に於ける時代文化の中心、名古屋の脈拍は、この不斷に動く「赤い心臓」広小路の呼吸から次第に高潮されてゆく。広小路の夜が織り出す光りと色と音の交響楽は、すなわち、中部日本に於ける代表的時代レビューである。⁴

市内中心部を東西に横断する広小路は、名古屋の近代化の象徴でした。多数の銀行が集まるビジネス街であり、栄屋や十一屋などの百貨店、小売店舗が立ち並ぶ商業地区であり、また、博覧会等を目当てに訪れた観光客を引きつける



図1 1919-30年頃と推測される広小路。左下に朝日神社、中央に十一屋(画像提供:名古屋市鶴舞中央図書館)

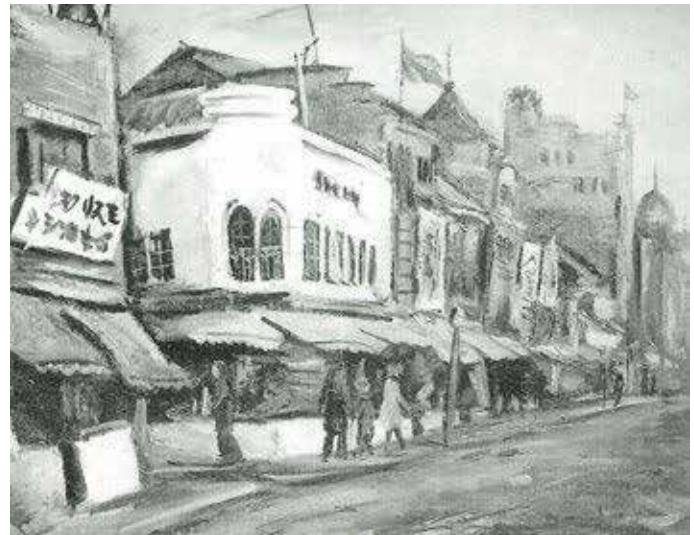


図2 市野長之介《広小路》1928年 (画像提供:名古屋画廊)

歓楽街でした(図1)。馬場伸彦が『周縁のモダニズム』⁵で紹介しているように、文学においては、島洋之助の『百万・名古屋』(1932年)や、小酒井不木の『名古屋スケッチ』(1930年)など、当時の活気を伝える都市案内が執筆されました。しかしながら美術の分野では、大名古屋躍進のこの時期、大正末期から昭和初期にかけての都市の諸相、ないしは広小路の姿を伝えるような作例があまり知られていません。

名古屋市生まれの洋画家、市野長之介(1905-1987)と西村千太郎(1907-1994)は、同時期に画家として歩み始め、名古屋の市街風景をのびやかな筆致で描いています。市野が1928年に描いたとされる《広小路》(図2)は、現存しているかどうか不明ですが、1930年の第4回フォーヴ美術展出品の折りに製作された絵葉書によって、その絵柄が知られています。画中、遠方にそびえる高い建物は、その形から十一屋(丸栄百貨店の前身)と推定できます。場所は現在のマルエイガレリアの差し向かい、栄町ビルが建っているところです。この構図は、広小路七間町付近から、北側の街並みを西から東に向かって眺めたときのものでしょう。なお、広小路には市電が通っていたため、道の中央には線路が敷かれ、道端には電柱が立ち並んでいたはずですが、これらの要素は画面から排除されています。

市野の《バザーの楽器店》(表紙絵、1930年)では、大きなショーウィンドウのある店舗と、それを取り囲むアーケードが描かれています。画面のほぼ真中にアーチの柱が位置する風変りな構図ながら、柱が傾いていることで、こなれた雰囲気がうまれています。ベージュやグレーを多用した色調には、翳りを感じさせる都会的な落ち着きがあり、赤紫や青など、部分的に用いられている鮮やかな色彩が効果的なアクセントとなって、画面に控えめな華やかさをもたらしています。入口には「二十七」の表札が掲げられています。

題名の「バザー」が指すものは、かつて広小路沿いにあった洋館「中央バザー」です。中央バザーは1912年1月2日に営業を開始し、1935年頃まで存続した名古屋最初の小売商館でした。場所は現在の三越百貨店北側の差し向かいです。青ペンキ塗りの木造館で、外観はヴェネツィアの宮殿を模したといわれており、2つのドーム型屋根と連続アーチを備えています。館内は60余りに区切れられ、区画ごとに小売店に貸し出されました。日用品店や文房具店のほかに、三国庄次郎のスタジオ「みくに写真館」や、小倉トースト発祥の店といわれる喫茶店「満つ葉」がありました。サンサシオン(当時、名古屋の洋画をリードしていたグループ)のひとつ。もうひとつはフォーヴ美術協会の会員で夭折した洋画家、加藤松三郎(1904-1931)はよく広小路界隈を散歩しており、「ひまわりを描きたいがよい瓶がないので広小路を探したが無し[...]夜食後広小路まで散歩に行った。中央バザーに適当な瓶を見つけた」⁶とある日の日誌につづっています。

た、中央バザーに併設された「栄ホール」は、演舞場や上映会場として使用されており、1923年の第1回サンサンション展はこの栄ホールで開かれました。

市野の友人である西村千太郎もまた、《バザー》(図3、1929年)を描きました。大胆な変形や軽妙な筆致をやや抑えて、外観の特徴をとらえています。中央バザーを撮影した写真はすべて白黒なので、その正確な色については知るすべがありません。誇張されている可能性はあるものの、市野や西村の絵画によって、私たちは100年前の中央バザーの雰囲気をある程度想像することができます。

カレー、バー、酒場、喫茶店

グレート・ナゴヤの人口、百万突破への躍進よりも、すばらしい勢いで殖えてゆくカレー、それからサロン、バー等々…の進出ぶりに驚かされる、どこまでもひびてゆく、名古屋のビカーチ道広小路を中心に[…]そしてそこに働く女給の群…アルコール含有の飲みものを主体として惑溺、惑溺、都会生活のジャズを交錯させて、幻覚的な照明、狂おしき夜のとばりがくくりひろげられてゆくところにいろいろな華が咲く⁷

20世紀前半のパリにおいて、カフェは芸術家たちの交流の場として重要な役割を担っていました。特に1920年代には、モンパルナス地区に新たなカフェやナイトクラブが開店し、ダンスパーティや仮装パーティがさかんに開かれていきました。では、同じ頃名古屋で活動していたモダンな洋画家たちとカフェとの関係はどうだったのかというと、詳しいことはわかつていません。

1929年7月には、「名古屋市内の中心地新栄署管内目下営業をしているのが130軒からあると云うから全市では恐らく500に近い喫茶店がある」⁸と報じられています。ただし、注意を要するのが、当時の「カフェ」の概念の幅広さです。単にカフェ=喫茶店ではなく、ステージを備えた事実上のキャバレー、女給による接待を主たるサービスとするものをカフェと呼称することもあれば、少し洋風を取り入れた程度の食堂をカフェの名で呼ぶこともあったようです。そのため、島洋之助が『百万・名古屋』で市のカフェを解説するにあたっては、アルコールを提供し女給が接待する狭義のカフェと、珈琲・紅茶を飲みつつ休息や待合に利用する喫茶店(純喫茶)とを区別する必要がありました。広小路には、名古屋を代表する(狭義の)カフェ、グランド・キャバレー・ユニオンとカフェ赤玉⁹がありました。新柳町のビルの地下にあった赤玉は、入り口にムーラン・ルージュを真似た赤い風車があり、地元客よりも東京や関西からの旅行客が多くいたといわれています。

加藤松三郎と同じくサンサンションの会員で、共に「広小路をテクル」仲間であった東野孝一は、1923-28年頃を回想し、「けれど俗に云う世間馴れた悪遊びは絶対しなかった。一パイやろうかと出かけても結果は、コーヒーで終わるものであり、中村へ行こうと云ってもそれは世間並の冗談語として用い止めるに過ぎない

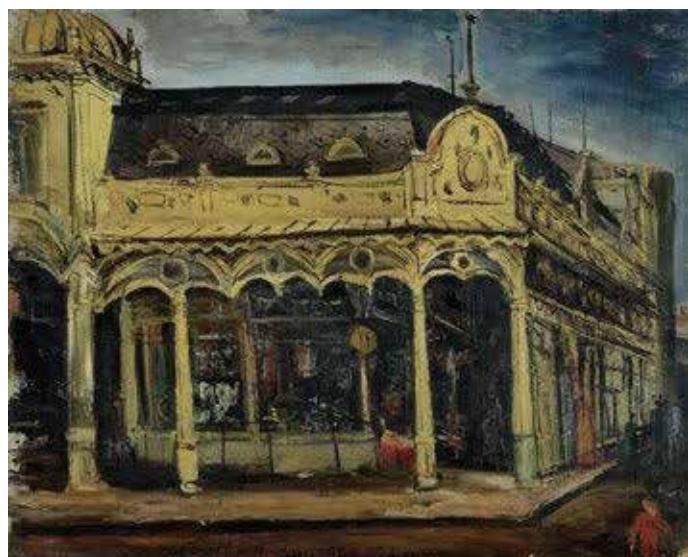


図3 西村千太郎《バザー》1929年(画像提供:名古屋画廊)



図4 市野長之介《カフェ》1931年 愛知県美術館蔵

く[…]今日明治か森永へでも行くように、パウリスター通いをなし、芸術論にコーヒーを冷ましたものである」¹⁰と、わざわざ真面目な一画学生であったことわっています。カフェ・パウリスタは、大津通沿い、現在の三越百貨店の場所にあった喫茶店で、相場師や新聞ゴロのたまり場であったといわれています。また、明治と森永は、それぞれ同名の製菓会社が直営していた喫茶店で、島洋之助は、喫茶明治(現在の広小路伊勢町交差点北西角付近)を「落付いていて芸術的気分が多いため、何時も芸術家連の姿を見ないことはない」¹¹と紹介しています。愛知県美術館が所蔵する、市野長之介の《カフェ》(図4、1931年)に描かれているのは、この喫茶明治の店内である可能性があります¹²。なお、西村千太郎は、1930年の第4回フォーヴ美術展に、中央バザー内の満つ葉を描いたとみられる《マツバ喫茶店》を、《納屋橋風景》等と共に出品したことが目録から確認できますが、残念ながら画像が見つかっていません。

第3回国勢調査

さて、百万記念祝賀大会に先立つ1930年10月1日には、第3回国勢調査が実施されました。その結果は10月21日に発表され、10月1日時点の名古屋市の人口は90万2436人(刑務所等の特殊区域分を除く)であり、8月末の公簿に基づく推計値と12万9459人の開きがあったことが報じられました¹³。実は1930年にはまだ人口100万人を突破していなかったのです。このような大きな誤差が生じていたという事実は、盛大な祝賀会を催行した直後ということもあって世間の関心を引き、市の首脳部は狼狽したといわれています¹⁴。現在、名古屋市が公表している統計によると、実際に100万人を突破したのは1934年とされており、1935年10月1日の第4回国勢調査で、108万2816人に到達していたことが公式に確認されています。(nori)

註 |

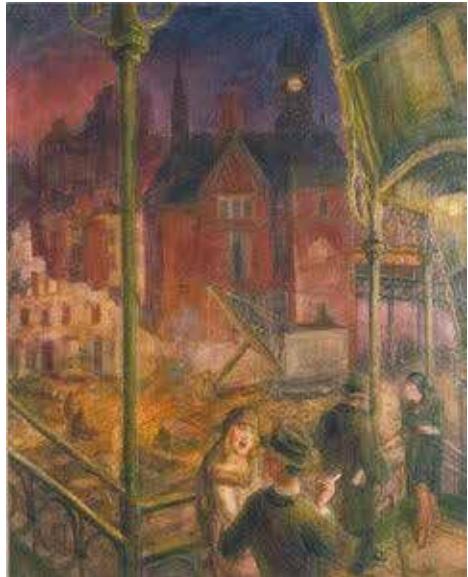
- *1 石川栄耀「「百万都市」(1)名古屋のプログラム」『名古屋新聞』1930年10月1日朝刊。
- *2 「大岩市長式辞」『名古屋新聞』1930年10月11日夕刊。
- *3 「サア歌いましょう祝賀行進歌」『名古屋新聞』1930年10月10日朝刊。
- *4 島洋之助(編・著)「百万・名古屋 復刻版」『百万・名古屋』復刻実行委員会、2012年、179頁。初版は島洋之助(編・著)「百万・名古屋」名古屋文化協会、1932年。
- *5 馬場伸彦「周縁のモダニズム モダン都市名古屋のコレージュ」人間社、1997年。
- *6 加藤松三郎「日誌」サンサンジョン(編・発行)『加藤松三郎遺作集』、1932年、24-25頁。
- *7 「青い灯・赤い灯(1) コーヒー杯で恋を語るモダン・ヂヂ」『新愛知』1929年8月9日夕刊。
- *8 「カフェ、喫茶店大はやり時代」『新愛知』1929年7月24日朝刊。
- *9 東野孝一「加藤君」サンサンジョン(編・発行)『加藤松三郎遺作集』、97頁。
- *10 島洋之助(編・著)「百万・名古屋 復刻版」、185頁。
- *11 「市野長之介作品集」(名古屋画廊、2014年)16頁によると、この題名を「カフェ(明治製菓の喫茶店)」と記した作家メモがあるという。
- *12 「名古屋市の人口90万2000余人」『名古屋新聞』1930年10月22日夕刊。
- *13 服部鉄太郎「写真図説 大正の名古屋 愛蔵版」泰文堂、1980年、447頁。

TALK BACK

ジョン・スローン
《ヴィレッジ監獄の解体》

2022年度の常設展「名品コレクションI」で、4月29日—6月26日(前期)、7月16日—9月25日(後期)に展示し、多くのコメントをお寄せいただきました。

○絵の空の色がとても印象的だと感じました。夕日が沈む様子にも見えるし、戦争や火事など事件が起きている様子にも見えます。(Mukai Koji、18歳)



○世界というかこの近辺が大きく変化する事件なのは空の色で伝わってきました。私はこの空の色は世の中の変化というのを表していると思います。
(Ryuki、21歳)

○絵全体では、暗い印象を受けますが、下の人たちは、楽しそうな明るい印象を受けて不思議です。(ひー、12歳)

○街から人々の不安材料がなくなりみんな安堵しているのかなと思いました。ヤレヤレ、やっとなくなりましたね これで一安心ですね。と…それならこの女性の笑顔にも理解できます。(Tomy、23歳)

○なぜ解体される事になったのかとか 入っていた罪人達はどこへ行ったのかなど 絵と関係ない所が気になりました。そして身近でこんな解体があったら自分も見に行こうなと思いました。(ゆか、30歳)

○この絵のあざやかな色彩や、裕福そうな人々が歓談している様子が印象的だったので、タイトルとのギャップにびっくりしました。[中略]緑色の柵やポールが、裕福な人々と、解体現場をはっきりと棲み分けているように感じます。(無記名)

○手前の人々はただの野次馬であり、監獄の解体という“ショー”を楽しんでいるだけのように見えま

す。しかし、1929以降、というよりこの時代以降、世界は変化のスピードを速めます。解体、という1つの終わり、変化は彼らにとって人事ではなく、これから自身に降りかかるかもしれない、見物人でなく当事者になりうるものであると考えられます。その事を彼らは予期できていたのでしょうか?(よしし、21歳)

○一気に解体される様子が、当時の世界恐慌となるようにも思える。[中略]一枚の絵の中には、崩壊と悦楽…または自分ごととしてとらえることのできない人間のおろかさのようなものを感じる。(S、60歳)

○とてもHIPHOPな感性だと思います。陽気な街の中にいるワイザツさ、暴力性、刑務所を主題にしたという事は、とても作者はこの街を称賛する意味で書いたとは思えない。自分の所属する地とその地に対して皮肉と愛情をこめて書いたと思います。(無記名)

作者のジョン・スローン(1871-1951)は、新聞の挿絵画家として出発。絵画においてもジャーナリズム精神を發揮し、大衆の日常生活の情景を描くことで、近代化で急激に発展する大都市ニューヨークの光と影を表現しました。世界恐慌が起った年に描かれた本作でも、着飾った富裕層の男女の背後に、解体現場で焚火にあたる労働者の薄い影が見つかります。(KK)

ARTIST

鈴木不知

Suzuki Fuchi / 1870-1930

本名:悦三郎。名古屋藩士の家に生まれ、1889年に上京し小山正太郎の不同舎で学んだが、母親の失明もあり1897年に帰郷した。1899年には大須・門前町に仮画場を設け、洋画の仕事を請け始め、翌年に洋画塾・有斐社(白墨会を経て1908年に名古屋洋画研究所に改称)を開いた。名古屋圏の洋画黎明期において、その振興に大いに寄与し「名古屋洋画壇の泰斗」と称された。門弟は合計で

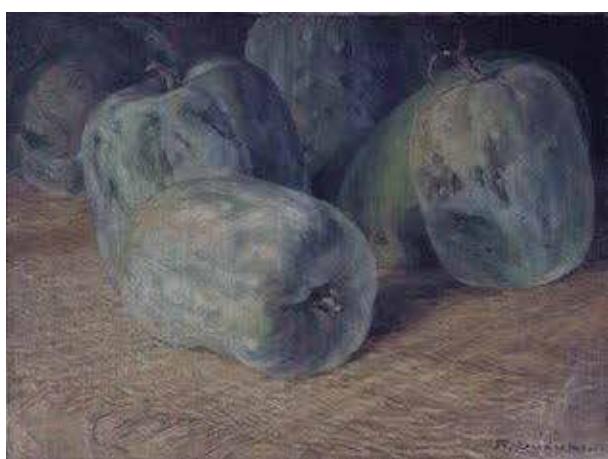
800人に達したとされる。また、1909年より日本陶器(現ノリタケカンパニーリミテド)で絵付指導を行った。画工の市ノ木慶治は鈴木の指導を受けた1人であり、1928年には帝展入選を果たすなど、洋画家としても活躍した。

1893年に明治美術会に参加、1902年の太平洋画界の結成においても名古屋より参加した。画風は写実主義を特徴とし、1910年に《山畠》(愛知県美術館蔵)で愛知県在住洋画家として初の文展入選

を果たした。同年の名古屋開府三〇〇年紀念新古美術展覧会では洋画部門の監査員となり、同展を発展継承するかたちで成立した東海美術協会では理事を務めた。《冬瓜》(名古屋市美術館蔵)は制作年不詳だが、愛知県固有種の早生冬瓜を描いており、名古屋帰郷後の作と考えられる。

画塾の壁に「今日から学生」「精神一倒」の標語を貼る、谷文晁の墨線に驚嘆し寝食を忘れ日本画習得に取り組む、晩年は禅に傾倒するなど、そのストイックな性格を示す逸話が多数残っている。一方で、名古屋洋画研究所で学んだ覚忠治の回想から、門弟への指導は自主性を重んじたものだったことがわかっている。

門弟たちは温舊會を結成し、定期的に展覧会を開催した。その出品目録には先述の市ノ木の他に、春陽会で活躍した魚津良吉、加賀孝一郎、二科会で活躍した西村千太郎、尾澤辰夫、市野長之介など、多彩な洋画家が名を連ねており、名古屋洋画壇における鈴木の貢献が伺われる。1930年に脳溢血により死去。翌年には門弟たちによって覚王山日蓮寺(現日泰寺)に墓碑が建てられた。(コ)



鈴木不知《冬瓜》 1900-30年 油彩・キャンバス 名古屋市美術館蔵

アンケートより

コレクションの20世紀

2023年4月15日(土)–6月4日(日)

所蔵作品を、普段の常設展での展示とは異なる切り口で紹介した本展覧会。歴史の流れと重ねながら、じっくりご覧くださった方が多かったようです。

○作品がうまれた社会背景や、美術の流れがとてもわかりやすく解説、まとまっていて学びある展覧会でした。名古屋市民として、市が保有するコレクションに愛着がわきました。珍しかったり、有名作だったりが巡回する展覧会も良いですが、地元にゆかりのある展覧会も良いものだなと思いました。(名古屋市、30代)

○分野を横断し、時代で美術を見ると、作品の新しい理解につながると思った。(県外、50代)

○現代になるにつれて幾何学的な絵が増えて、解釈がムズかしいと感じた。しかし、面白かった。(愛知県、20代)

○芸術は単に作品の上手さでなく、作者が伝えたい事を推測するものでもあると思った。(愛知県、30代)

○何かを描く時にはぼやかして描いても、はっきり描いても、それぞれの絵の個性がでることがわかりました。(名古屋市、小中学生)

○タマヨの《苦悶する人》を見て、急に苦しくなり、涙が出てきました。画を見て泣いたのは生まれて初めてです。この画を見られただけでも来た甲斐がありました。(愛知県、60代)

○ピンクポートの説明文が好みでした。「かわいい」という感想は使いがちなので思わずわらつちゃいました。コメントを考えた方と話してみたいです。(千葉県、20代)

○解説はありがたいが、個人的感想もまじっているので、まず先に自分の目で見なければならないと思った。自分の感性を大事にし、自分の頭で考えることが大事だと思うから。(名古屋市、60代)

○いつもは特別展の後に常設展会場で見るのでは、あまりじっくり見る事が少なく、感動もうすかつたが、今日はメインで見られてよかったです。しおりもツイッターで知り、大人ももらって大丈夫との事で、いつもは気になっていたが見る事はなかったので、しおりを見ながらの鑑賞も面白かったです。(愛知県、50代)

○ボランティアの方によるギャラリートーク、楽しませていただきました。またこのような企画があれば参加したいと思います。(愛知県、50代)

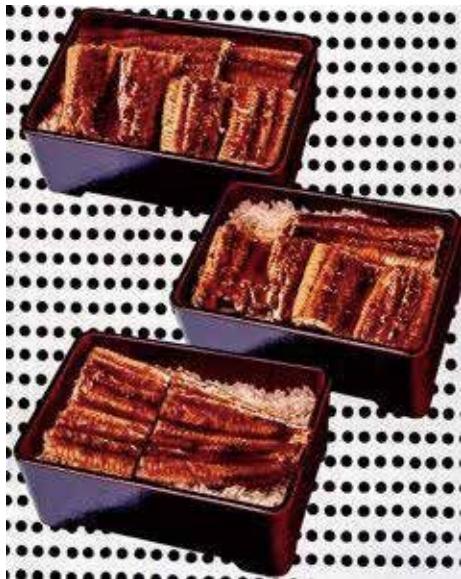
来場された皆さんがそれぞれ所蔵作品の音声ガイドアプリ(常設展でも運用中!)、展覧会のしおり、ギャラリートーク、会場内の解説文などから好みのものを選んで、時には組み合わせて活用し、展覧会を主体的に楽しめている姿が印象的でした。(3)

展覧会現在進行形

開館35周年記念

福田美蘭——美術って、なに?

2023年9月23日(土・祝)–11月19日(日)



福田美蘭《松竹梅》2017年 アクリル・パネル 千葉市美術館蔵

美術って、なに?——この言葉は、福田美蘭が今も昔も考え続ける問いを端的に表しています。社会における美術の役割、絵画の可能性とは……? デビューしてから約35年間、福田はこうした根源的な問いをもち続け、絵画でさまざまな挑戦を続けてきました。ときに鋭く、ときにユーモラスな切り口で、古今東西の名画を読み解いたり、同時代の社会問題をテーマに描いたり。この秋、名古屋市美術館で開催予定の個展は、福田のこれまでの画業を俯瞰するとともに、みなさまを“福田美蘭ワールド”へといざなうものです。

福田は、東京藝術大学大学院を修了後、具象絵画の登竜門と言われる安井賞を最年少で受賞して注目を集めました。安井賞は福田にとって契機となり、それ以後、「なぜ自分は絵画を描くのだろう?」と深く考えるにいたします。そこからの福田の作品は、絵画だからこそもつことができる自由な視点や想像力を生かしたものへと発展していきます。福田は、「見ること」にこだわってきたと話しますが、実際には、「見て、考えること」が彼女の絵画の主眼だと言えます。固定観念を取り払って見たらどうだろう? この角度から見てみたら、世界が変わって見えるのではないか? 作品は、福田自身が感じたことを絵にしているのですが、私たちは彼女の絵を見て、自分の考えがいかに凝り固まっていたかに気づかされます。

今回は、東海地方で初めての個展ということもあり、この地方ならではの文化とつながりの深い作品《松竹梅》(2017年)を広報用のメインビジュアルとして選びました。伝統的な豆絞りの手ぬぐいを背景に、饅のお重がドーンと並ぶこちらの作品。さて、饅が美術とは…? いったいどういうことなのでしょう?

——“美術って、なに?”——みなさんも、会場でぜひ考えてみてください。(haru)



展示風景

ラテンアメリカの民衆芸術

2023年3月9日(木)－5月30日(火)

国立民族学博物館

「Arte Popular」(アルテ・ポブル)の世界へようこそ。」という言葉が来館者を出迎えていた本展覧会。展示室の中に入ると、一般に「民衆芸術」と聞いてイメージする、ユニークな実用品や玩具や装飾品の数々が並びます。その後は、章ごとに「民衆芸術」を定義し、ラテンアメリカという文化がヨーロッパやアフリカ系の文化の混濁によって形成されていく過程から、20世紀前半に政府の公共政策として手工芸品が発展してきた歴史が紹介されていました。そして「民衆芸術の拡大」として、民衆芸術を「市民による批判精神の表現」と捉え、現代の政治・社会的事件や暴力をテーマとした作品が続いていました。

ラテンアメリカの国民文化が築かれていた中で民衆を描いた作品として、当館のコレクションからフリーダ・カーロの《死の仮面を被った少女》、ディエゴ・リベラやホセ・クレメンテ・オロスコの版画がパネルで紹介されており、「メキシコ・ルネサンス」をコレクション収集の柱の一つにしている当館としては見逃すことのできない展覧会でした。その点で見ると、死者の日の祭壇の再現や《死の仮面を被った少女》のパネルの両脇に掛けられた死の仮面と虎(ジャガー)の仮面



会場風景
写真提供:国立民族学博物館

は、メキシコの宗教文化が持つ空気を肌で感じることのできる展示でした。

しかし本展覧会で特筆すべきは、「市民による批判精神の表現」と定義された第4章の民衆芸術でしょう。過去の暴力を記憶するパッチワークのアルビジェラや失踪事件の解明を訴えた文字と挿絵によるアヨツィナバ文書、不条理に抵抗するためのストリートアート、木版画は、それまで見てきた手工芸品とは大きくかけはなれたようなものにも見えますが、一市民としての民衆が、自らが生きる社会・政治と対峙しながら何かを生み出さんとする営みという点や、表現手法の点で通じるものがあるように思いました。とともに、第5章の仮面を眺め、また本館に展示されている世界の文化に圧倒されながら、異なるものをひと纏めにして均すために「民衆芸術」や「多様性」という言葉があるのではないかと、改めて言葉の意味を考えてみるのでした。(mm)

八幡はるみ GARDEN

2023年4月21日(金)－8月27日(日) ヤマザキ マザック美術館

八幡はるみは1956年に大阪に生まれ、京都市立芸術大学で染色を学んだ。時代がアートを追求するなか、「装飾的なもの」への興味を「まるで隠れキリシタン」のように守り、自分の世界を育てていったという。時代を生きる作家としてはさまざまな葛藤もあったと想像するが、「感動に出会いたい、感動で震えるような体験をしたい、それを伝えたい」という本人の言葉が示すように、自分の心に響いたものを共有できたら素晴らしいという思いがエネルギーとなり、染めによる豊かな創作の世界を開拓してきたことが会場を巡っていくと伝わってくる。本展には40点ほどが出品され、1990年代から近年までの活動をたどることができる。

染めは材料や技法、また染める時間や温度などにより染め具合が変わるために、意図せぬ形や色合いが生まれる。その偶発的な染めの特徴が、生き生きとした草花を生み出し、一方、草花がしつとりとした日本の気候を感じさせるように息づくのは、作家が身近な自然や暮らしのなかに気づいた感動や美が、創作の源にあるからだろう。

八幡によって生み出された世界は、豊かな色の世界でもある。自然の草木がさまざまな緑や赤色を見せるように、作品にも多彩な緑や赤色が見られる。《Colors》(2003年)では、布の上で色やかたちが幾重にも重なり合い、空間が奥へと広がり、色の力に圧

倒される。そして花と色の世界に分け入っていきたくなるような、ワクワクとさせる世界が目の前に広がる。

染色技術は時代の求めに応えるように発展しており、時代に合った技術を探るのは当然と考える八幡は、デジタル技術を取り入れた作品も制作している。展覧会の最終盤、新作を含むパネル45枚で構成される《GARDEN》(2008-23年)は、デジタル・プリントをはじめとした混合技法で制作された大作だ。75cm角という大きさの中で草花がそれぞれ生きている。多種で多彩なものが共存することがにぎやかで愉快――今の私たちに求められる世界観を伝えてくれているようを感じた。(I.)



会場風景：左《colors》、右奥《Shangrila-Nami》写真提供：ヤマザキ マザック美術館

メキシコ美術のポピュラリティ

長い休館の後、今春久々に常設展示を担当した。同時期に1階と2階で収蔵作品による特別展「コレクションの20世紀」を開催していたため、ある程度展示候補作品が限られてはいたものの、それでも考えていた展示ができた。

当館独自の、かつ良質のコレクションを誇る(メキシコ・ルネサンス)のコーナーでは、ホセ・ガダルーペ・ポサダ(1852-1913)の版画作品より(カラベラ)のシリーズを選び、「骸骨の壁」を現出すべく、四段組みで展示してみた。決して上質ではない紙に刷られたエッチング作品の“壁”は、最近目にしなくなってしまったが、これこそまさに、「自画自賛」と呼ぶのだろう。

期間中、東京の大学で教えるメキシコの研究



ホセ・ガダルーペ・ポサダ
《お子様劇場 脇牛とイルサの恋》
n.d.(c.1888-1913)
金属版・紙 名古屋市美術館蔵

者がポサダの展示を見に来てくれた。当館のポサダの版画作品群は保存状態も良く、メキシコの現地ですら見出せない程質が高いと評判である。

研究者の長谷川ニナさんは、ポサダとともに、彼が所属していた版画工房〈バネガス・アロヨ社〉と創業者のアントニオ・バネガス・アロヨの研究

に関する第一人者である。彼女によると、同版画工房は、「家族的経営の中小企業の印刷屋さん」で、同工房が出版、刊行していた「大衆向け出版物」とは、タブロイド版新聞をはじめ、双六や占い、小歌集など、多種多岐にわたっていた」という。

彼女との会話で、収蔵するポサダ-バネガス・アロヨ関連の資料のなかで、それまで不明であった用途や目的について新たな知見を得ることができた。そのうちの一冊、はがきサイズの小冊子群は、人形劇やサークスの道化芝居の台本集、さらにはカトリックの奇蹟譚の絵解説など、であることが判明した。

それらの資料は一見したところでは、「junk(ガラクタ、安物)」以外の何ものでもないのだが、メキシコの人々の日常生活における信仰心までを伝えるその重要性を改めて認識することになった。革命後のメキシコ美術については、ややもすれば、国家的プロジェクトとしての壁画運動に確認できる「啓蒙的な民族主義」ばかりが注目されがちであるが、それを下支えした民衆の、手触りを伴い、郷愁を呼び覚ますような感覚こそが、ポサダをはじめメキシコの美術の根底にあることは間違いないようだ。(J.T.)